

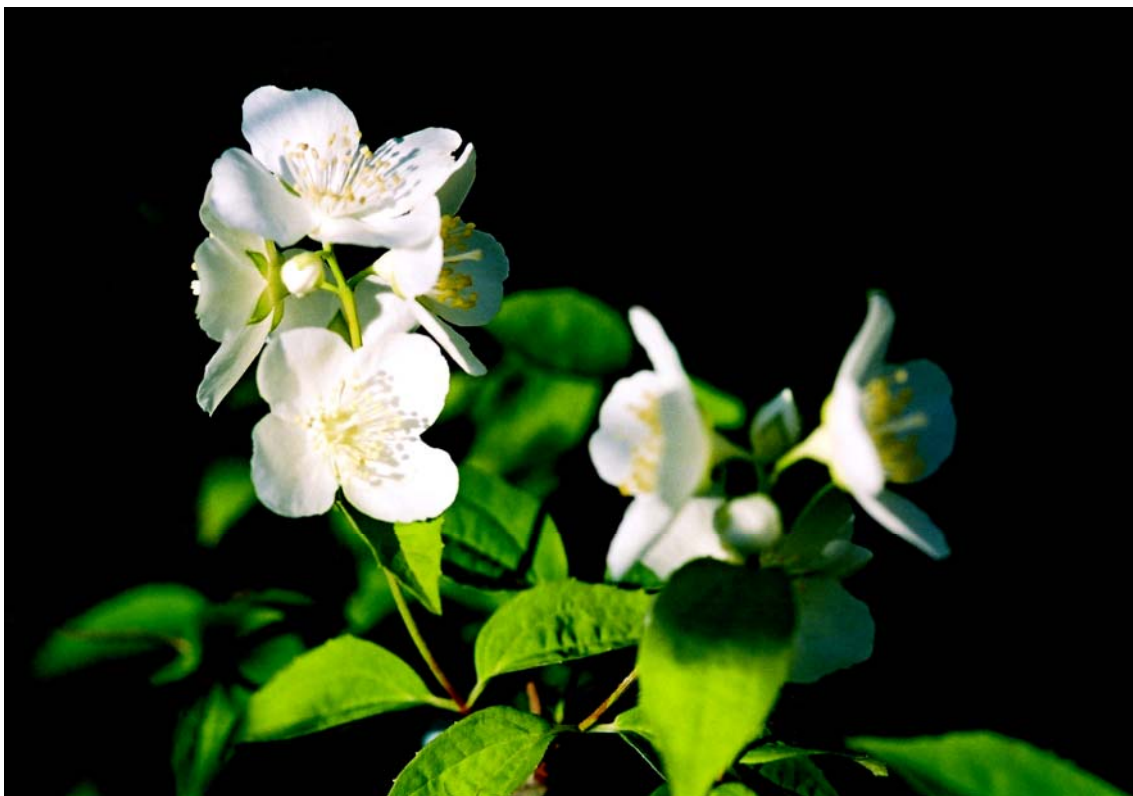
3) バイカウツギとハコネウツギとベニウツギ=梅花空木と箱根空木と紅空木

ウツギと名のつく植物はユキノシタ科からスイカズラ科にいたるまで数多く、また美しい花が咲くために、庭木としてもよく植えられている。昔は茎が中空になっている植物は、どれも空木(ウツギ)と呼ばれたのだろう。ここでは植物的な分類を離れて空木をいくつか紹介しよう。

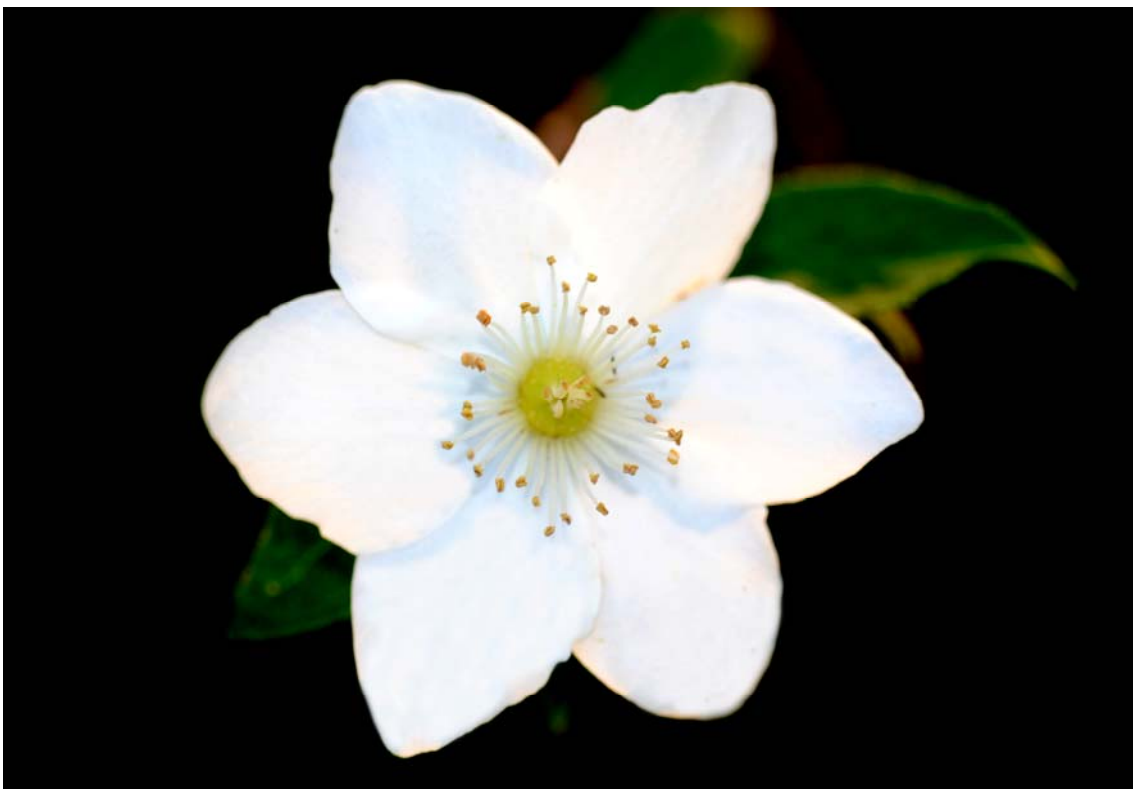
バイカウツギはユキノシタ科の落葉低木で、本州、四国、九州などの山地に自生する。高さは2~3mで、葉は対生し柄があり、長さは5~7cmの楕円形である。縁にはまばらに鋸歯があり葉脈が目立つ。初夏、枝先に集散花序をつけて、梅に似た白い4弁花を数個ずつ開く。和名の由来は花が梅に似ているためで、別称としてフスマウツギとかサツマウツギなどがある。学名は『*Philadelphus satsumi*』で、属名は古代ギリシャにおいて、同定できない植物の総称に用いられていた言葉で、原産地不明とされていたことによるものである。種小辞はサツマウツギを略したもので、この植物は特に南ヨーロッパで、古くから栽培されており、おそらくかなり古い時代に日本からもたらされてものなのだろう。庭木として観賞用に栽培されるほか、香水や香料、茶の原料にもされている。

一方ハコネウツギはスイカズラ科の落葉低木で、日本各地の海岸付近に生える。箱根とつくにもかかわらず箱根には自生しておらず、どこかで誤認されたものらしい。高さは2~5mに達し、樹皮は灰白色である。楕円形の葉は長さが6~16cmほどで、肉質はやや厚く、表面には光沢がある。5~6月頃、葉腋から花穂を出して、長さが3cmほどで弁先が5裂した漏斗状の花を数個まとめてつける。花は初め白色で後に紅色に変わるものが多い。このため、源平ウツギとか源平ウノハナなどと呼ばれることも多い。しかし最初から紅色のものや、最後まで白色のものなどまちまちである。他に藤ウツギとか、山ウツギなどという別称もあり、花冠の基部から蜜を分泌するところから、スイバナなどという地方もある。学名は『*Weigela coraeensis*』で、属名はドイツ人の科学者C.E.フォン・ウエイゲルの名に因み、種小辞は朝鮮のという意味で、中国では『錦帯花』と呼んでいる。観賞用に栽培されるほか、材は木釘にしたり、昆虫標本を作るピン代などに利用されている。

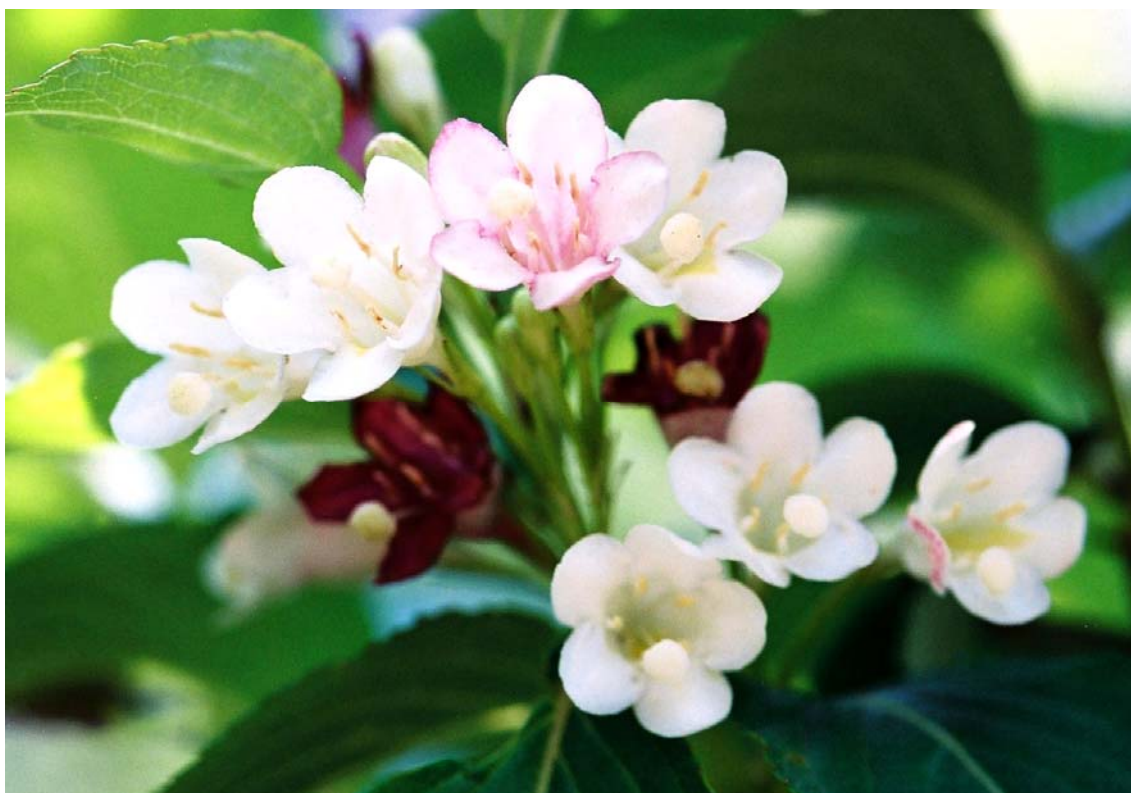
ベニウツギはタニウツギの別称で、オオベニウツギやアマギウツギ、フジベニウツギ、ヤブウツギなど赤い花を咲かせるウツギ類の総称として用いられることも多い。高さは2~3mほどで、他のスイカズラ科のウツギ類と同様に5~6月ごろ漏斗状の花を多数つける。学名は『*Weigela hortensis*』で、種小辞は庭園栽培のという意味である。また中国では『楊樞』である。日本では地方によって「枝を折ると雨になる」とか、「持って帰ると火事になる」といった俗信がある。これは美しいウツギの枝を折るのを、禁じるために広められたのだろう。ウツギの仲間は水揚げが悪く切り花にはならない。案外そんなところにもこの俗信の理由があるのかも知れない。



バイカウツギの花、花弁数が4弁だったり5弁だったり、時には6弁だったりすることもある。雄蕊が弁化することが多いために不安定なのだろう。



バイカウツギの花、雄蕊が旗弁化することもよくあり、この花は6弁である(さいたま市緑区)。



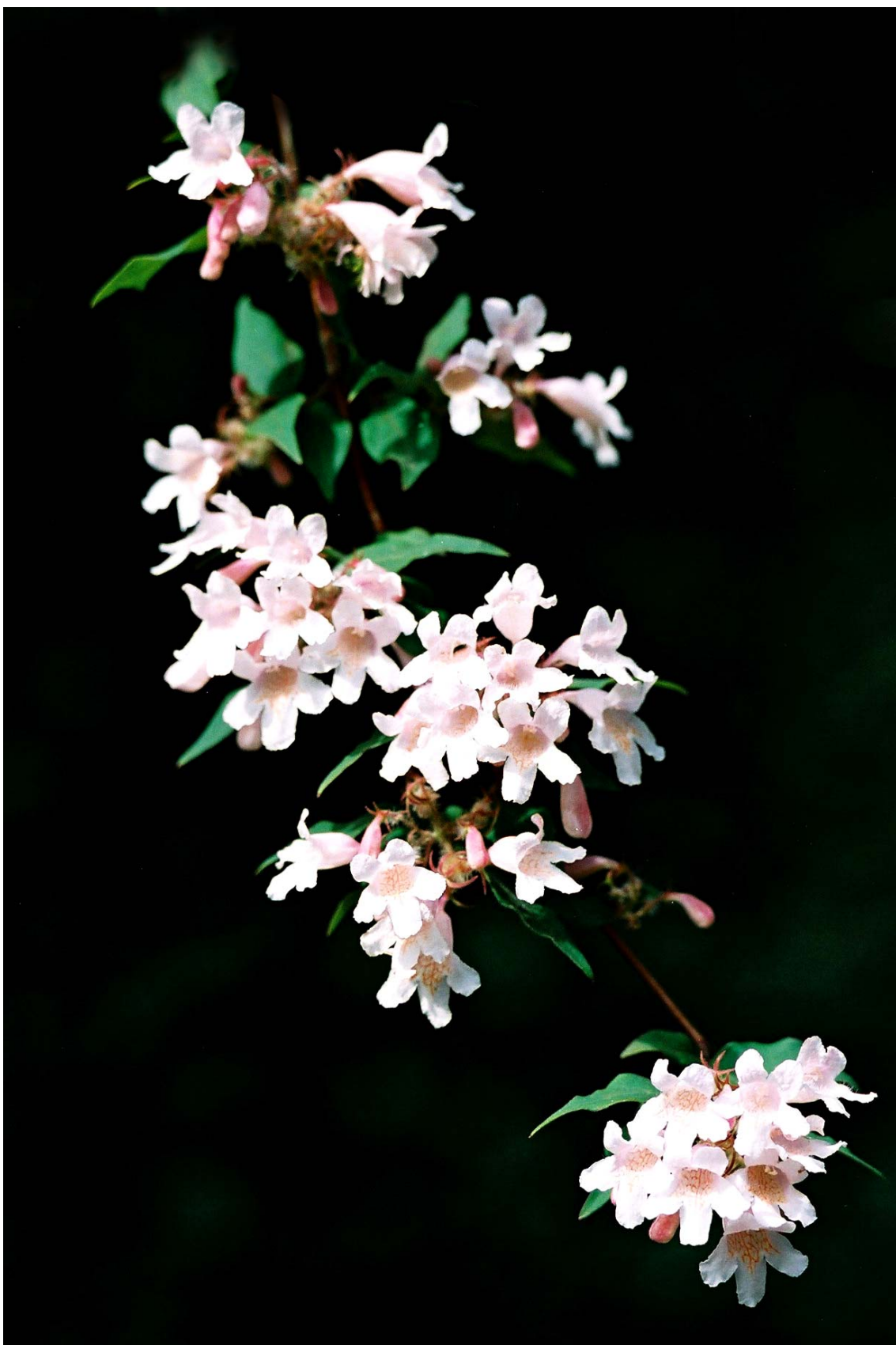
ハコネウツギの花、箱根と付くものの箱根にはあまり自生していない。和名と地名の関係はシラネアオイ(01-02-09)やトガクシショウマ(01-02-10)のように最初の発見地であることが多い。



ハコネウツギの花は咲き始めは白く、次第に赤みを増してゆく。



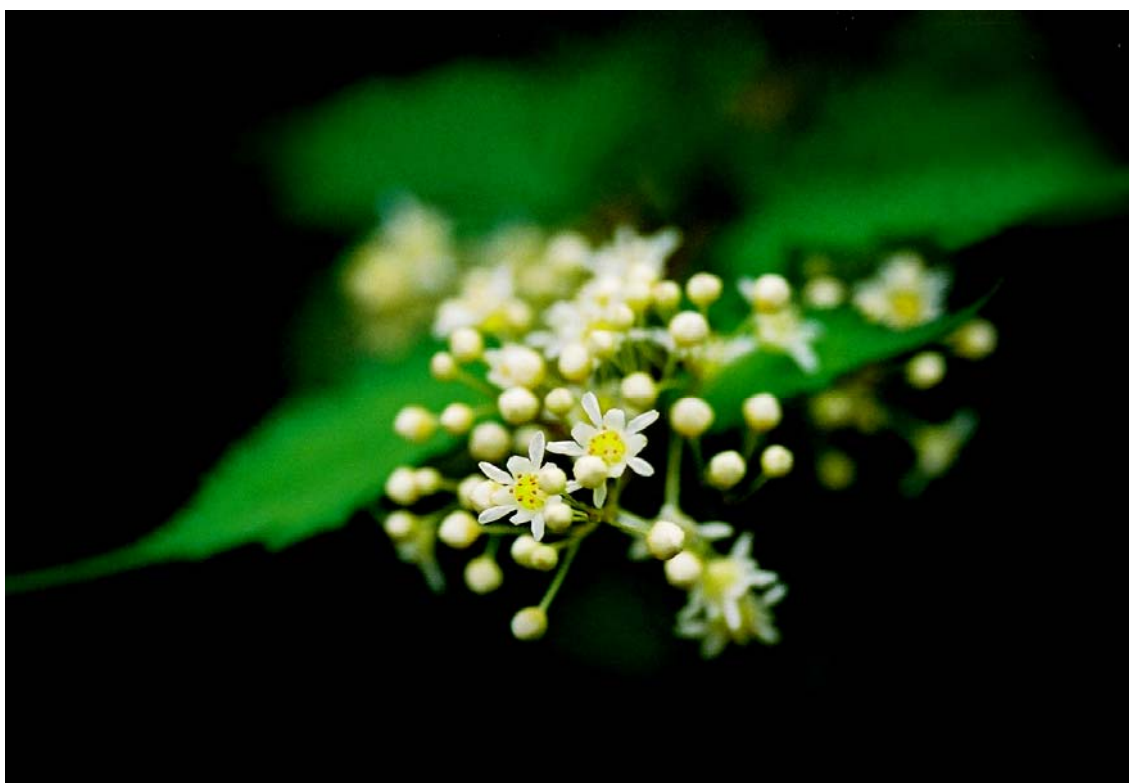
ベニウツギノ花は最初から赤い花を咲かせる(埼玉県児玉郡)。



ヒメウツギの花は、学名『*Deutzia gracilis*』で、全体が華奢な感じである(小石川植物園)。



タニウツギの花、ベニウツギのような派手さはないが、それゆえに多くの人から好まれる。学名は『*Weigela hortensis*』である(東京都小石川植物園)。



コゴメウツギの花、学名は『*Stephanandra incisa*』で、北海道から四国、九州にいたる低山地帯や丘陵地に普通に自生する(東京都文京区小石川植物園)(下の写真は薬用植物園)。



毒ウツギの果実、学名は『*Coriaria japonica*』、食べると痙攣・呼吸困難を起こす。

[目次に戻る](#)